様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２６９１

研究課題名（和文）異文化コミュニケーション能力の育成と評価―CEFRを基盤とする英語教育の展開

研究課題名（英文）Cultivation and Assessment of Intercultural Communicative Competence-promoting English Education in Japan based on the CEFR

研究代表者
川成　美香（KAWANARI, Mika）

明海大学・外国語学部・准教授

研究者番号：６０２２４８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本人が英語で実際に何ができるかという行動主義的な英語コミュニケーションを身につけるためには、スキルを越えて駆使できる「異文化コミュニケーション能力（ICC)」が必要である。その能力の中核をなすのは、CEFRにも謳われている「社会言語的な適切さ（Sociolinguistic Appropriateness）」であることを実証的に示し、その育成と評価の方法を具体的に提示した。「外国語（特に英語）コミュニケーション能力に関する到達指標となるジャパン・スタンダード」（川成編,2013）に付与する枠組みを考案し、海外研修および海外留学、CLILによる英語指導の有効性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
2020年小学校3年生からの英語必修化を目前に日本の英語教育界では、外国語教育の分野で世界基準となっているCEFR（ヨーロッパ共通参照枠）の基軸が、学習指導要領や大学入試、英語資格試験等の到達基準の指標に採用され、Bレベル、Aレベル等の用語が広く一般に浸透している。しかしこの基準は、英語の4技能（聞く・話す・読む・書く）に関する指標であって、この4技能だけでは実際の英語コミュニケーションは成り立たない。日本語と異文化とのコミュニケーションスタイルの違いをふまえた英語運用能力の養成が必要である。本研究は、異文化コミュニケーション能力とは何か、どのように育成・評価すればよいのかを実証的に提示する。

研究成果の概要（英文）：In order to develop communicative English skills that Japanese can actually behave in English, "Intercultural Communicative Competence (ICC) " should be necessary in addition to 4 skills of English. We demonstrated empirically the core of the ICC was "Sociolinguistic Appropriateness" described in CEFR, and presented prospective methods of cultivating and assessing ICC. We devised an additional framework to be given to " Japan Standards for Foreign Language Proficiency-based on the CEFR." (Kawanari ed., 2013), and showed the effectiveness of overseas training, studying abroad, and CLIL-style English instruction.

研究分野：社会言語学、英語教授法、語用論

キーワード：異文化コミュニケーション能力　ICC　ジャパンスタンダード　CEFR　英語教育　CLIL　到達指標　社会言語的適切性

１．研究開始当初の背景

(1) 本研究の出発点は、川成美香代表「外国語コミュニケーション能力育成のための日本型CEFRの開発と妥当性の検証」(分担:岡秀夫・笹島茂、平成22年～24年度、基盤研究B、22320180、以下「川成科研」）にある。「川成科研」の中心課題は、世界基準である CEFR に準拠した、外国語（とくに英語）運用能力に関する新たな基準である「ジャパン・スタンダード」（Japan Standards for Foreign Language Proficiency-based on CEFR: 以下 JS）の策定および教育現場での JS の応用実践を提示するものであった（『川成科研研究成果報告書』平成 25 年 3 月)。JS プロジェクトは、世界基準である CEFR との整合性を保ちつつ日本の社会文化的コンテクストに適合するよう「日本型 CEFR」を策定した。

(2) この JS を公開した 2013 年 3 月、文部科学省は「5 つの提言」(2011 年 7 月）に続いて、「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」を発表した。それ以降現在に至るまで日本の英語教育の現場は、CEFR の理念のひとつであるこの『CAN-DO リスト』をめぐって新たな局面が進行している。この局面の本質は、「英語ができる」だけではなく「英語で実際に何ができるのか」という行動主義的な英語コミュニケーション能力を育成することにある。この点は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2013 年 12 月）でも明確になった。

(3) さらに、その背後には日本人特有の「異文化コミュニケーション能力」の問題をはらんでいることを（JACET&IIBC,2013）見逃せないことに着目した。例えば、TOEIC で高得点をもつ日本人ビジネスマンが、アメリカ人とのビジネスミーティングで英語による商談にコミュニケーション上の問題を生じるのは、文化、商習慣、会議の運び方などに日米の違いがあることに起因する。このような日本人特有の問題を解決するには、「言語能力」である英語のスキルだけでなく「異文化コミュニケーション能力」の側面を、今後の英語教育の中で対応していく必要があるとの着想に至った。

２．研究の目的

(1) 当初の研究目的は、4 技能の習得だけでは解決できない日本人特有の「異文化コミュニケーション能力」の問題点を明らかにし、どのように英語教育で対応すればよいのかを実証的に研究することにあった。英語教育の現場が、コミュニケーションとしての生きた英語力を身につけるための行動主義的な英語指導へと変革しつつあるなか、さらに、スキルを越えて「異文化コミュニケーション能力」の育成と評価の方法、およびその指導法の提示も急務であると考えた。すなわち、外国語学習には「言語能力」とともに不可欠な「異文化コミュニケーション能力」に着目し、その評価ツールとしての「異文化コミュニケーション能力」の参照枠と CLIL(内容言語統合型学習)による指導法の開発を目ざすものであった。

(2) その背景には２つの理由があった。①ビジネスパーソンがビジネス交渉をする上で生じる日本人特有の国際コミュニケーション上の問題がある。これは「言語能力」だけでなく、それ以上に、話者交代のシステムやポライトネスの概念を含む語用論的、社会言語的な側面がからむ「異

文化コミュニケーション能力」の欠如による。②その「異文化コミュニケーション能力」の育成にあたっては、日本のような EFL 環境では英語授業だけでは限界がある。生きた英語を身につけるには英語で何か行動をするインターアクションが必要で、それには理科や社会を英語で実践するという CLIL 的な英語指導が効果的である。欧州各国では CEFR 準拠した CLIL による言語教育が主流になりつつあることが実証されている。

３．研究の方法

(1)　本研究は、前記の基盤研究（B）で策定した CEFR 準拠の「JS:ジャパン・スタンダード」を新しい側面から発展的に研究すべく、世界に通用する日本人の英語コミュニケーション能力向上に必要な、「異文化コミュニケーション能力」の育成および評価法と指導法を射程に入れた。

(2)　まず、欧州での CEFR 基盤の異文化コミュニケーション能力の開発ツールの実践例を精査する。それと同時に、英語コミュニケーションにおける日本人特有の社会言語的能力に関する中心的特徴を抽出するために、CEFR に示される「社会言語的な適切さ」の尺度を精査して応用する。それらをもとに、「JS:ジャパン・スタンダード」の 4 技能尺度に付与する「コミュニケーションの社会言語的適切性」の尺度を考案し、これを日本人大学生のアメリカやイギリス、豪州への海外研修・海外留学の効果測定のための事前・事後アンケート調査に応用実践した。

(3) さらに、欧州における異文化コミュニケーション能力育成のための CLIL による外国語学習・教授法の実態を精査する。そこから得た知見等をもとに、日本人大学生を対象にボスニア・ヘルツェゴビナでの異文化コミュニケーションプログラム（International & Intercultural Communication program（IICP））を実践してその教育効果を考察した。

４．研究成果

(1)　欧州には CEFR を基盤として「複言語・複文化的アプローチ」により策定されたさまざまな異文化コミュニケーション能力開発ツールがあり、その運用方法とともに公開されている。①ECML(ヨーロッパ現代語センター)の FREPA(Framework of Reference of Pluralistic approaches to Languages and Cultures)（最新資料：ECML/CELV 2011-2018）や、②Council of Europe(ヨーロッパ評議会)の異文化体験記述ツールの Autobiography of Intercultural Encounters（最新資料：Council of Europe 2018）、③フィンランドなど EC 加盟国 8 か国での職業人のための異文化コミュニケーション能力の評価ツールである CEFcult project (2009-2011)などがある。①FREPA は、言語・文化への多元的アプローチのための参照枠である。多元的アプローチとは、同時に複数の言語・文化を扱う教育的アプローチのことであり、CEFR で示す複言語・複文化能力は包括的であるので，言語教育は，生徒がすでに知っているか、学習している言語との関係性の確立を助けるべく言語・文化間の橋渡しをしなければならない。FREPA の参照枠は、場面ごとに必要な言語的タスクを示し、そのタスクを遂行するための knowledge, attitudes, and skills の尺度から構成されている。②Autobiography of Intercultural Encounters は、異文化の体験を、異文化の人との出会いから直接体験する場合と、テレビ、映

画、インターネット、雑誌などのビジュアルメディアを通じて体験する場合を想定して、人々が異文化との出会いから何を学び、考えるべきかを奨励するために設計されたツールである。前者はフランス語、イタリア語、ポーランド語、スペイン語、ロシア語での利用が可能、後者は英語とフランス語での利用が可能となっている。③CEFcult project は、職業人の異文化コミュニケーションにおける口頭言語能力を評価するツールを開発した。フィンランド、ベルギー、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、ポーランド、イギリスの 8 か国における 12 団体を対象として、EU の生涯教育プログラムの一環として策定され、オンライン上で自己評価および他者評価に利用できる。少なくともこれら３つの異文化コミュニケーション能力開発ツールを精査してわかるのは、その背景に欧州の人々の 3 言語習得という原則があり、日常的にも職業的にも国境を接する異文化の人々とのコミュケーションを成立させるためには、複言語・複文化能力が必須であることが明確にわかる。CEFR の言語能力尺度を、日本の英語教育・言語教育に適応させて日本版 CEFR を策定するのと比較して、日本人のための異文化コミュニケーション能力の尺度を策定するには、より社会文化的なアプローチが必要であるとの考えに至った。

(２)そこで原点に立ち返り、英語を使って異文化コミュニケーションを行う際に必要な日本人特有の社会言語的能力の中心的特徴を抽出するために、CEFR に示される「社会言語的な適切さ」の尺度を精査した。それをもとに、「JS:ジャパン・スタンダード」の 4 技能尺度に付与する「コミュニケーションの社会言語的適切性」の尺度を考案し、これを「JS:異文化コミュニケーション能力」の到達指標のエッセンスとして規定した。一方、日本人英語学習者が異文化コミュニケーションを実体験する場として、大学生の短期海外研修や長期留学がある。前記のエッセンスをもとに、異文化コミュニケーション能力の伸びを質的に測定できるような尺度を明示して「全般的コミュニケーション能力」と称した。それを、既存の４技能についてのアンケート（川成, 2013）に５領域目として付与して CAN-DO 方式の自己評価アンケートを作成し、研究代表者の勤務校における海外研修および海外留学に参加する大学生を対象に、事前・事後アンケートのデータを 2016 年度から 2018 年度にかけて継続的に蓄積した。アンケートの 5 領域それぞれは 14～19 項目からなっており、その分析結果（川成, 2018, 2019）によると、短期海外研修において英語４技能のうち事前事後で有意差が顕著だったのは「リスニング」と「スピーキング」で、「全般的コミュニケーション能力」と称した 5 領域目の指標は、有意差が最多となった。この「全般的コミュニケーション能力」の指標は、CEFR では「社会言語的な適切さ」に関するものであり、挨拶や呼びかけなどの社交的な言葉遣いや、ポライトネスなどの言語的配慮や発話する事への自信など、語用論的能力にも関連する。この指標を構成する能力は、「異文化コミュニケーション能力」の根幹とみなすことができると結論した。さらに、研修で向上した英語のスキルやコミュニケーションは何かを問う自由記述では、この指標のキーワードが多く見られた。短期間であっても留学によって英語コミュニケーションへの自信などが得られることは、異文化への気づきや学習意欲を高めることになり、日本人にとって留学は「異文化コミュニケーション能力」を養成する有効な手段であるといえよう。さらに、短期間の海外研修ではテストスコアでの有意な伸び

を確認しづらいが、スキル向上の質的側面を数値化することで、学習効果の「可視化」が可能となり、４技能プラス社会言語的な適切性の尺度は弁別力のある測定ツールであるといえる。

(3)「異文化コミュニケーション能力」の育成方法として CLIL 的指導方法が欧州ではすでに定着しており、日本においても近年は盛んに実践されている。研究分担者は日本における CLIL 研究の第１人者であり、かねてよりボスニア・ヘルツェゴビナの言語教育の専門家と相互文化間理解に関する学術的交流を通して、とりわけ早期英語教育における CLIL についての知見を蓄積している。本研究との関連では、Larisa Kasumagic-Kafedzic 氏（Sarajevo University）による“Intercultural Approach to English Language Teaching: Teacher Education and Classroom Implications in Bosnia and Herzegovina”と題する招待講演会を開催した（於：東洋英和女学院大学， 2016 年 7 月 16 日)。相互文化的な交流には偏見やステレオタイプを持たない事が重要で、相互文化的な学習をとおして、学習者は多角的な物の見方を身につけたり、異文化間の複雑な関係を理解できるようになるという。また、相互文化的な教授法は、ヨーロッパの多くの国において教員研修の重要な部分を成し、異文化の人々との共生は 21 世紀における教育の重要な課題であることを学習者に教えることが特に重要である。さらに研究分担者は、勤務校の日本人大学生にボスニア・ヘルツェゴビナ現地での異文化交流を体験させ、異文化コミュニケーション体験の諸相を観察した(Sasajima，2018)。この異文化交流プログラムは“International & Intercultural Communication Program (IICP)”と題して研究分担者が企画し、Sayajevo 大学とタイアップして実施したものである。プログラムの骨子はいわゆる語学研修ではなく、Sayajevo 大学においてボスニアと日本の文化を共有する異文化ワークショップに参加したり、現地の小学校を訪問して日本文化を紹介したり、簡単な日本語を教えたりする活動を行った。使用言語は英語と日本語であった。折り紙や書道を英語で教えるという、CLIL 的指導を実践したことになる。参加者の多くが異文化体験の面白さを経験し、異文化を受容する態度が重要性であると報告した。さらなる異文化交流への興味が増したことは言うまでもない。

(４)まとめとして、スキルを越えた「異文化コミュニケーション能力」の育成には、海外研修プログラムや異文化交流プログラムが効果的な手段であることを実証的に示すことができた。また、「異文化コミュニケーション能力」の評価ツールとしては、語学の 4 技能を駆使するのに全般的にかかわる「社会言語的な適切性」を明示する能力記述が有効であることを統計的に明示した。今後の展望としては、この評価ツールをさまざまな海外研修・海外留学・異文化交流プログラムにおいて応用実践をして、CLIL 的英語指導法にも組み込めるより包括的な「異文化コミュニケーション能力」の評価方法として精緻化していきたい。

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（計 3 件）

①Sasajima Shigeru、“The issues of application and validation for the contextualization of

CLIL in Japan”, Application and Validation for the contextualization of CBLT/CLIL in Japan, Toyo Eiwa University, 査読無, 2019, pp.13-69.

②Sasajima Shigeru、“Non-native English Teachers’ Cognitions about Language Pedagogy”, Current Issues in Second/Foreign Language Teaching and Teacher Development Research and Practice, 査読有, Vol.1, 2015, pp.104-119.

[学会発表]（計 10 件）

①Kawanari Mika, Intercultural communicative competence of Japanese EFL learners and the effectiveness of studying abroad on cultivating the competence, 16th International Pragmatic Conference (IPRA 2019), The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong, June 14, 2019

②川成 美香、海外研修・海外留学の効果測定：英語運用能力および異文化対応能力の質的分析、日本英語教育学会・日本教育言語学会 第 49 回年次大会、早稲田大学、2019 年 3 月 3 日

③Kawanari Mika, Is Japan still a monolingual society? -Intercultural communicative competence of Japanese EFL learners and the effectiveness of studying abroad on improving the competence, Multilingual Awareness and Multicultural Practices (MAMP18), Tallinn University, Tallinn, Estonia, November 22, 2018.

④Kawanari Mika, The effectiveness of studying abroad on improving communicative language competence of Japanese EFL learners, Second International conference on Soiolinguistics (ICS-2), Eotvos Lorand University, Budapest, Hungary, September 8, 2018.

⑤Sasajima Shigeru, CLIL can vary in each teacher and leaner, 18th World Congress Applied Linguistics (AILA 18), Windsor Barra Hotel & Contro de convengoes, Rio de Janeiro, Brasil, July 25, 2017.

⑥Sasajima Shigeru, Cultivating intercultural awareness through CLIL classrooms, The 2nd International conference on Bilingual Education, Cordoba, Spain, November 15, 2016.

⑦笹島 茂、統合型英語教育における異文化間多様性（全体シンポジウム『CLIL における統合の意味と文化の扱い』）（招待講演）、大学英語教育学会関東支部大会、2015 年 7 月 12 日

[図書]（計 1 件）

①Sasajima Shigeru, eds. International & Intercultural Communication Program (IICP) in Bosnia & Herzegovina 2018-REPORT. Toyo Eiwa University. 2018.

６．研究組織

(1) 研究分担者

笹島 茂、SASAJIMA, Shigeru, 東洋英和女学院大学・国際社会学部・教授
研究者番号：80301464